

これは私の一方的な感想と憶測に過ぎませんが、庵野監督はどこかで流れを見誤ったような気がしません。或いは、そもそもスタート地点を間違えたのではないかという思いさえしています。

もはや旧聞に属するかも知れませんが、映画『シン・仮面ライダー』のお話です。私は庵野監督とは同年齢で、また同じ時代の空気を共有した往年のライダー少年でもあります。にも拘らず屈指のライダーオタクと言われる監督が渾身の力を込めて撮ったはずの映画から受ける違和感は半端端ではありませんでした。そして見終わった後も続くモヤモヤ感がついぞ晴れることは無かったのです。

二〇二一年四月の制作発表の際、庵野監督は『オリジナル映像に思い入れのある人も、知らない人も楽しめるエンターテインメント作品を目指す』という旨の発言をされていますが、実際それはかなり困難な道であったに違いありません。

ここで監督の言うオリジナルの『仮面ライダー』とは、昭和四十六年四月からテレビ放送された実写ヒーロー番組を指します。世界制覇を企む謎の秘密結社ショッカーが作り上げたサイボーグである仮面ライダーが脳改造直前で脱出し、人類の自由と平和を守る為ショッカーの繰り出す怪人と死闘を

繰り広げるお話です。このとき登場したライダーは通称『仮面ライダー1号』と呼ばれています。

原作は言わずと知れた石ノ森章太郎先生。当初は子ども番組とは思えぬ全篇を包む暗く異様な雰囲気で見聞率は伸びなかったようですが、主演の藤岡弘氏の撮影中のバイク事故により急遽代役として登場した佐々木剛氏による『仮面ライダー2号』が大人気を博し、未曾有の変身ヒーローブームを巻き起こしたのでした。

『シン・仮面ライダー』はこの1号2号二人のライダーの物語なのですが、テレビオリジナル版と石ノ森先生の原作漫画版の骨の部分を引き出して、そこにライダーを知らない人にも楽しめるような今風の解釈と演出を加えた所為か、結果的に物語としてチグハグな印象を与えることになってしまった感があります。

もともとそれはオリジナルを知らなければ気にもならない枝葉的なことでし、それ故に映画として面白くなかったと言っている訳でもないのです。ただ私は『シン・仮面ライダー』を見て子供の頃の心躍る高揚感を再び味わえると思っていました。そうならなかったことが未練として残っているのかもしれません。

2023.5.21

1399

号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

## 空き家 7 木幡智恵美

蘇る家④

隣保だけでなく、道路を挟んだ向かい側の家々も同じように空き家が増えている。道路の東突き当り一軒目が空き家、西へ進んでいくと、一軒をとばした次の二軒が空き家、その西二軒は高齢の方の一人暮らし。その隣が空き家、そして昨年家が壊された後の更地、また空き家となっている。

二年前に他界した義母がまだ家の前に歩いて出られる頃、駐車場の脇に腰かけるスペースがあり、そこに義母が座っていると、お向かいの奥さんやその隣の奥さんが寄ってきて、井戸端会議が始まったものだ。お向かいさんも、そのお隣さんも、数年前に施設入所され、二軒とも空き家になってしまった。駐車場脇の井戸端会議場に今は誰の姿もなく、たまにうちの孫が来て座るくらいだ。

そのお向かいの隣の家に、数か月前から業者さんが頻繁に出入りし、家具などを持ち出されるようになった。ここも壊されてしまわれるのだろうかと思っていたところ、この春、若いご夫婦が入られた。義母とよく井戸端会議をしていた方のお孫さん夫婦だということだ。これまでずっと空いていた駐車場に、朝夕二台の車のエンジン音が聞こえてくるようになった。駐車場で出会ってあいさつを交わすと、つい顔がほころびてしまう。

玉湯に居る娘たちの家の裏は山で、竹がたくさん生えている。四月の半ば頃、忠ちゃんが、土嚢四袋に箆を詰めて持ってきた。近所中に配り、その新しく入られた人の家にも持って行く。そして、数日後、奥さんがお菓子を持ってこれられ、恐縮してしまった。受け取った夫によると、「嬉しかったんです」と言われたのだそうだ。慣れない土地、家に入り、心細い面もあったのだろう。早速ご近所扱いされたことが嬉しかったのかもしれない。

この春、隣保の工務店Kさんところの実歩と同年の次女さんが小学校に上がり、お姉ちゃんと一緒に我が家の前を通って学校へ通うようになった。お隣さんは小学校二年生になり、集団登校の集合場所に朝出かけて行く。隣保に子どもたちの声が聞こえるようになり、向かいには若い夫婦が住まい、うちの周りが急に活気づいてきた。

30代フリーター ゼレンスキーが、ロシアとの戦争は数年あるいは数十年続く可能性があると語ったそうだが（4月30日共同通信）。

年金生活者 いま考えられる最も高い可能性を語っているように思える。ゼレンスキーもプーチンもこの戦争にそれぞれの国家の存立がかかっていると考えて引くに引けずに膠着状態に陥っている。

崩壊したソ連から独立したウクライナは、これまで西側に傾いたり、ロシアのほうへ引き戻されたりしながら、基本的な流れとしては西欧的な国民国家の形成に向かっていた。ロシアの仕掛けた侵略戦争は、ウクライナ国民を結束させ、その流れを一気に加速したと言える。

他方、プーチンはロシアを近代的な国民国家としてではなく、前近代の「帝国」として復興させることに力を注いできた。「帝国」は周辺に服属国やそれに準ずる国家をしがたえ、それをつっかえ棒にすることによって、統

治のピラミッドを形成する。プーチンにとつて、ウクライナはそんなつかえ棒のとりわけ重要な1本だ。それが西側に寄り、NATOに加盟するのは、「帝国」の統治のピラミッドを破損させ、自らの独裁権力を脅かす事態ということになる。

30代 国民国家と「帝国」の戦争でもあるわけだ。

年金 国民国家の前提である国民の等質性は、異質性の排除によって成り立つ。排除するには国家の内部と外部を厳密に分けなければならず、そのためには厳密な国境が不可欠だ。それを崩す領土の侵犯は国家の存立を脅かすのみなされる。国民国家たらんとしているウクライナにとつて、ロシアの全面撤退は最低限の要求となる。

これに対し、「帝国」には厳密な国境はない。本国と服属国、準服属国がグラデーションをなして序列を形成している。だから、プーチンは平気でウクライナをロシアと一体のように扱う。

30代 この戦争の犠牲者数は、ロシア側がウクライナ側の数倍とする報道が西側のマスメディアからなされている。

年金 そのとおりだとすれば、人命を第1には考えないロシアの権力の前近代的な性格をそこに見ることができ

る。

ウクライナが西側諸国から高性能の武器の提供を受けて戦っているのに対し、ロシアはそれより性能の劣る武器で戦わざるを得ず、死傷者を増やしている、と一般には見られている。だとしたら、それでもロシアが戦争を続けられるのは、人間を武器の代わりになることによつて、本来の武器の性能の低さを補っているからだと推定することができる。

フーコーなら、西側諸国の権力が人生かして管理する近代特有の「生権力」であるのに対し、ロシアの権力は逆らう者を殺す前近代の権力と言うかもしれない。政府に逆らう人物が暗殺されるのがロシアの現状だ。

ロシアでそうした権力が維持されて

いるのは、この国が前近代的な「帝国」であり続けているからだ。この「帝国」は近代化によつて滅びることではなく、逆に強化された。帝政ロシアのあとに出現したソ連、そしてソ連崩壊後のロシアは、いずれも近代の科学技術や市場経済を採り入れることによつて強大化した。

今ふたたび世界史を左右するまでになつた中国の姿に、私たちはそうした「帝国」のしたたかき、恐ろしさを見ている。

30代 小原凡司という元海上自衛官の軍事ジャーナリストが「中国社会は死者が出ることに敏感である。人民解放軍に死者が出れば、中国社会は強く反発するだろう」と指摘している（『人民解放軍の弱点とは』、『文藝春秋』2023年2月号）。

年金 「敏感」の理由として思い当たるのは民主化運動を武力弾圧した天安門事件のトラウマと、急速な市場経済化を進展させたグローバリゼーション

ニュース日記 877  
中村 礼治

## 「帝国」の権力

問がわく。中国は前近代的な「帝国」で

あり、フーコーによれば、近代以前の権力は逆らう者を殺す権力のはずだからだ。そうでなく、犠牲者を出ることを恐れているとすれば、それはフーコーのいう生権力、人間を生かして管理する権力ということになる。

おそらく中国は「帝国」として前近代的な権力を保持しつつ、部分的に生権力を併せ持つようになったのではないか。中国の強大化は資本主義の急速な発展によるもので、その発展は「改革開放」の名のもとに進められた外資導入をはじめとしたグローバル化の進展に支えられている。その過程で米欧諸国の生権力を模倣せざるを得なくなったと考えられる。

そしてもうひとつ考えられるのが、天安門事件で西側諸国から受けた激しい非難と厳しい制裁によつて「改革開放」にブレーキをかけられ、それがトラウマとなつて流血に「敏感」になつたことだ。これは経済大国化と並んでロシアにはない経験だ。